
幼 児 教 育 史 学 会

第 10 回大会プログラム

2014 年 12 月 6 日（土）

お茶の水女子大学 共通講義棟 2 号館 2 階 201 室

プログラム

【受付】9:30～ 共通講義棟 2号館 1階

【自由研究発表】10:00～12:30

司会：一見 真理子（国立教育政策研究所）
福元 真由美（東京学芸大学）

1. 10:00～10:30 中村五六の幼児身体認識について

発表者：朴 淳香（鶴見大学短期大学部）

中村五六（1861年生）は、1890～1900年代の保育界をリードし、幼稚園教育の理論と実践の両面に渡り、基礎を確立した。本発表では、中村の著述である『幼稚園摘葉』（1893年）、『保育法』（1906年）、『婦人と子ども』、『京阪神保育会雑誌』等から、中村の幼稚園教育の理論と実際の土台にある幼児の身体認識を検討する。1893年、『幼稚園摘葉』を著し、第10章「唱歌及び遊嬉」では、「唱歌は幼稚園教育に最も大切なるもの」として教育的効果を挙げ、また、遊嬉について、その種類と教育的効用を説明、特に戸外遊嬉の重要性を説いた。

中村の『婦人と子ども』に掲載されている著述のうち、幼児の身体認識に関して言及している記事には、①育児で大切にしたいこと「育児学（講義）」（Vol. 1No. 1～5）（1901年）、②行進遊嬉の目的「行進遊嬉について（保育者のため）」（Vol. 5 No. 1 p. 65-68）（1905年）、③幼児に適切な体力的遊戯「幼児の体力的遊戯に就いて」（Vol. 7 No. 9 p. 15-17）（1907年）、④健康判定の材料「実用育児学講義」（Vol. 8No. 5～7）（1908年）がある。

中村の幼児身体認識は、当時の育児学からの知見、フレーベル思想、アメリカの幼稚園雑誌に掲載されている論考から得た知識、中村が主事を務めていた女子高等師範学校附属幼稚園分室の保育実践などから次第に明らかになっていったと考えられる。中村は、幼児の身体の形態的側面と機能的側面からの発達を明らかにしようとし、また、幼児期の特性を十分に理解した上で、幼稚園教育において身体の教育を行おうとする保育内容の基礎を築いていたと言えるだろう。中村が取り組んだ保育内容・保育方法改革は幼稚園教育発展の基盤を作ったことで評価されているが、中村の深い幼児身体認識の形成は、その一端を担っていたと考えられた。

2. 10:30～11:00 戦時下の東京女子高等師範学校附属幼稚園
——「日誌」の記録を中心に——

発表者：松島 のり子（お茶の水女子大学）
織田 望美（お茶の水女子大学・院）

第二次世界大戦開戦後、世界を舞台に繰り広げられた戦争は、幼稚園の日常や子どもたちにも少なからず影響を及ぼした。幼い子どもたちもまた、保育という営みをとおして、国を挙げて臨む戦いに巻き込まれてきた。

先行研究では、戦時下における幼児教育・保育の制度や政策の変遷、保育理念や実践に及んだ影響などが明らかにされてきた。倉橋惣三や城戸幡太郎をはじめ、当時の幼児教育・保育界をリードしてきた人物に着目した研究もある。それらの研究では、当時刊行された雑誌『幼児の教育』や機関誌『保育問題研究』、保育日誌などの一次資料が用いられてきた。

戦時下という非常時において、記録された資料はもとより、その後残された資料も限られている。そうしたなか、日本最初の官立幼稚園として発足し、現在に至るまで歴史をつないできたお茶の水女子大学附属幼稚園には、東京女子高等師範学校附属幼稚園時代の園「日誌」が残されている。その記録は戦時下においても続けられ、幼稚園が保育機能を停止した1945年4月頃までの日々の記録が継続して認められている。

本研究で検討する「日誌」は、保育日誌とは異なり、必ずしも子どもや保育の様子を読みとれるものではない。また、雑誌などに寄稿された論文のように、テーマに即して推敲された文章でもない。保姆らによる幼稚園の業務記録ともいえるもので、保育中のことのみならず保育時間外のことにも多く記録されている。そうした特徴を有していることから、幼稚園における日々を一定程度の客観性をもって把握し、戦時下において幼稚園のあり方や「日常」が変容していく様子をうかがい知ることできる。

本発表では、1930年代から1945年4月までの「日誌」を主たる資料として検討する。そして、戦時下という時代において、東京女子高等師範学校附属幼稚園や園の保育のあり方が、どのように変容してきたのかを跡づけていく。

3. 11:00～11:30 『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和 28 年)の音楽傾斜
——保育要領改訂委員会資料(昭和 24 年)と関係者へのインタビュー調査から——

発表者：田邊圭子（北陸学院大学）

保育要領改訂委員会は、坂元彦太郎が委員を召集し、昭和 23 年 9 月に設置された。委員会発足当初、坂元自身も委員であったが、昭和 26 年 6 月に文部省を離れたため最後まで委員として携わることはできなかった。

坂元は当初、音楽と身体的な表現を一体としたものを作成しようとしていたが、刊行された『幼稚園のための指導書 音楽リズム』は、音楽に傾斜しており、坂元が意図するものではなかったと言われている。

『幼稚園のための指導書 音楽リズム』が音楽に傾斜したもので終わった背景として、保育要領改訂委員会の関与が考えられる。しかし、従来保育要領改訂委員と審議の様子は明らかにされていない。そこで本発表は、国立教育政策研究所教育図書館所蔵「大島文義旧蔵文書」に収められている、昭和 24 年に作成された史料と委員へのインタビューから、昭和 24 年の保育要領改訂委員と審議の様子的一端を明らかにするとともに、音楽に傾斜した背景に関する考察を試みるものである。

史料と委員の一人であった真篠将氏へのインタビュー調査から、次のような音楽傾斜に至る背景が考えられた。

・委員 23 名には音楽関係者の割合が多く、身体運動関係者には戸倉ハルと舞踊の専門家である邦正美の 2 名しかいないなど、委員構成の偏り。

・この当時、『幼稚園のための指導書 音楽リズム』ではなく、『幼児のためのおんがくとリズムの本』を作成しようとしているが、司令部の影響が強く、絶え間ないチェックを受けていたこと、また、司令部の意向で短期間での原稿を完成させなければならず、議論が急がれた可能性。

・原稿は、分担を任された委員が書いたものを委員会でディスカッションしながら作り上げたこと、小学校など教育全般に関する委員会も同時並行で行われていたため、複数の会議を掛け持ちする委員がいた。そのため、短期間での原稿完成のために、議論が急がれ、十分な議論がなされず時間切れになった可能性。

4. 11:30～12:00 昭和 31 年度「幼稚園教育要領」の作成過程におけるアンブローズ、ユアーズの関与
——CIE カンファレンス・レポート、ウィークリー・レポートを中心に——

発表者：織田望美（お茶の水女子大学・院）

本発表では、1956（昭和 31）年 2 月に刊行された「幼稚園教育要領」の作成過程について、CIE 側から編集委員としてその作成に関与していたアンブローズおよびユアーズの視点に着目し検討を行う。これまで「幼稚園教育要領」の作成過程については、宮内（1955, 1976）や武田（1956）、坂元（1980）など、主に日本側からその作成に携わった当事者らにより紹介されているものの、具体的な資料に基づき、その実証的な検討を行った研究はほとんど認められない。特に、1951（昭和 26）年 5 月に発足した幼稚園教育の要領編集委員会には、CIE 側からアンブローズ、ユアーズの両者が参加していたが、彼らが「幼稚園教育要領」の作成に際していかに関与していたのか、その実際については従来ほとんど明らかにされてこなかった。

そこで本発表では、GHQ/SCAP 文書内、CIE 部内報告書の一部であるカンファレンス・レポートおよびウィークリー・レポートを中心に、「幼稚園教育要領」の作成過程における CIE 側関係者の関与について検討を行う。これらレポートはそれぞれ「日報」、「週間報告」という性格を有し、数ある CIE 関係資料の中でも特に「系統的な重要資料」（鈴木, 1988）とされるものである。そこには、各担当官と文部省関係者との間で行われた会議の内容をはじめ、その他活動の様子が各自の所見を交えて報告されている。したがって、本発表が注目する「幼稚園教育要領」の作成過程を含め、占領期に行われた教育をめぐる種々の取り組みについて CIE の視点から検討していく上で、両レポートの分析はその基盤となるものと考えられる。なお、上記レポートを中心とする CIE 関係資料の分析から明らかにされたアンブローズやユアーズによる関与の意味については、当時の米国における幼児教育の理念や占領政策の移行などとの関連のもとに考察を行っていく。

12:00～12:30 全体討論

【昼食】 12:30～14:00

【シンポジウム】 14:00～16:30

テーマ：「子どもと戦争」

趣旨説明：

今年でちょうど 100 年目という、日本では、何が？と聞かれることが多いが、今年、ヨーロッパでは、あちこちで 100 年目の催しが盛んに行われている。100 年前の 1914 年は、のちに第一次世界大戦と呼ばれることになる人類史上はじめての世界中を巻き込んだ戦争が始まった年である。この 1914 年に始まった第一次世界大戦は一旦終結するものの、それはさらに第二次世界大戦を引き起こすこととなり、20 世紀は戦争の世紀と呼ばれることとなる。1914 年は世界を巻き込んだ戦争の世紀の始まりを告げる年であるともいえる。

1914 年当時、植民地からの収奪の上に繁栄を誇っていたヨーロッパで、人々の多くは何事もない毎日を、ささやかに暮らしていたのかもしれない。そして、その日常があつという間に戦乱の中に突入することなど予想できた人はそう多くはなかったにちがいない。戦争は街の有り様を一変させ、暮らしの変貌を余儀なくさせる。子どもたちの生活も同様である。混乱の時代のなかで、子どもはどのように生まれ、生活し、育てられてきたのだろうか。さまざまな資料のなかで、幼い子どもたちはどのように生きたのか。

2014 年の現在、第一次世界大戦勃発から 100 年もたつというのに、やはり戦争や紛争が絶えない時代が続いている。私たちの日常があるときから驚くような変化のただ中に突入してしまうことなどない、という保障はどこにもないのだ。

さて、今回の子どもと戦争というタイトルは、その背後に、幼児教育と戦争というテーマを考えるための手始めとしたい、ということから考案された。この幼児教育と戦争というテーマのなかに、さしあたり、以下の三つの論点を考えている。第一に、世界大戦の時代に、幼児教育において共時的にどのような変化がもたらされたのかという論点、第二に、世界が同時に経験したといっても、戦争は、勝者と敗者という対立する立場を作り出すわけであるが、このことを幼児教育はどのようにとらえたのかという問題、そして第三に、幼児教育の誕生と戦争との関係である。

もとより、以上のような議論をすべてすすめるには、これまでの膨大な研究の蓄積を振り返る必要があり、さらなる研究と議論が積み重ねられなければならないだろう。しかし、世界大戦勃発から 100 年目をむかえる 2014 年という年に、子どもと戦争というテーマで、幼児教育を検討することは、これからの議論を積み重ねていくうえで何らかの手がかりを得ることができるのではないかと考えている。

提案者： 米田 俊彦（お茶の水女子大学）

寺岡 聖豪（福岡教育大学）

指定討論者：湯川 嘉津美（上智大学）

司会者： 小玉 亮子（お茶の水女子大学）

【総会】 16:45～17:30

【懇親会】 18:00～20:00

連絡先： 幼児教育史学会 第 10 回大会実行委員会

〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付

Phone / Fax： 03-5978-5342

E-mail： ochadai.youjkyoikushi@gmail.com